

年報

名古屋大学大学院人文学研究科
教育研究推進室

2018

目次

巻頭言 名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室室長 池内 敏 i

I 教育研究推進室の活動報告 1

1. 大学院生支援事業 1
 - 1-1 研究発表支援事業一覧 (2018年度) 1
 - 1-2 フィールド調査プロジェクト一覧 (2018年度) 2
 - 1-3 フィールド調査プロジェクト報告書
 - Hoang Thi Lan Phuong
日本語二字漢字語の理解におけるベトナム語漢語の音韻類似性の影響 3
 - 川里 卓 20世紀前半の芸術批評における身体性と有用性 5
 - 奥村華子 1950～60年前後の炭鉱における文化運動に関する調査
——福岡県筑豊地方と大牟田市を中心に 6
 - 澤 茂仁 近代ヨーロッパにおける映画と科学技術の交渉とその受容に関する調査 7
 - Tinchurina Damira
日本語とウズベク語の謝罪表現・謝罪ストラテジーの異文化間比較
——両国でのフィールドワークを通して 8
 - 内田朋美 被災者支援における宗教団体の協働関係構築の経緯と傾向についての調査 9
 - 王 毓茜 中国人日本語学習者における多義基本動詞の習得に関する一考察 10
 - 山内良祐 北陸における縄文時代の下呂石利用状況調査 11
 - 張 揚 台湾のプロテスタント・キリスト教病院における
キリスト教文化と医療従事者の宗教体験の聞き取り調査 13
2. 教育研究推進室主催の行事 (FD・ワークショップ・その他) (2018年度) 15

II 人文学研究科の教育・研究活動 16

1. 教員の著書 (単著) 一覧 (2018年度) 16
2. 教員の自著紹介 17
 - 大室剛志 『動詞と構文』 研究社 17
 - 藤木秀朗 『映画観客とは何者か——メディアと社会主体の近現代史』 名古屋大学出版会 18

III 各種データ 19

巻頭言

2017(平成29)年4月に、文学研究科、国際言語文化研究科、国際開発研究科国際コミュニケーション専攻を統合再編し、名古屋大学大学院人文学研究科として発足してから、2年が過ぎました。旧文学研究科に設置されていた教育研究推進室も、人文学研究科の発足後もその組織は継続され、この2年間、様々な活動を行ってまいりました。大学院生に対する支援事業、研究科の教育・研究の支援に関わるワークショップ等の開催、日本学術振興会特別研究員の応募・採用の促進など、旧文学研究科でも行われていた教育研究活動の活性化に向けた取組に加え、これらの活動全般の評価に必要な各種データの収集、分析等も進めているところです。

特に、大学院生に対する支援事業としましては、「フィールド調査プロジェクト」及び「研究発表支援事業」の2種類があり、前者は、現場での調査や史資料の収集を幅広く含めた、広義のフィールドワーク調査を行う院生を対象として、後者は、国内外を問わず国際研究集会での発表を行う院生を対象として、主に旅費を支援することを企図した事業を展開しております。昨年度も、両事業を合わせて15名の大学院生がそれぞれの訪問先を訪れることができました。予算的に厳しい状況が続いておりますが、今後も身の丈に合った支援が継続できればと思います。

また、ワークショップ等の開催につきましては、旧文学研究科の頃と比較いたしますと、盛況というには程遠く、今後の展開を待たざるを得ません。しかし、昨年度は、統合再編を経て様々な分野の研究者が所属することとなったこの人文学研究科で、ヒトを対象とした研究における研究倫理体制の検討が進み、研究者同士の情報交換の場として「自己紹介の会」が開催されるなど、少しずつ活動が活発化していく兆しがみられているのではないかと期待しているところです。

2017年度の活動につきましては、「『年報』2017」にまとめ、昨年度刊行いたしました。今年度も2018年度の活動報告といたしまして、「『年報』2018」をここにお届けいたします。名古屋大学大学院人文学研究科の教育研究活動状況を広く皆様に知っていただくことで、ご理解をいただき、ご意見を仰ぐことができれば幸いです。

名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室室長

池内 敏

I 教育研究推進室の活動報告

1. 大学院生支援事業

1-1 研究発表支援事業一覧 (2018年度)

氏名 (専攻・分野・専門) 学年※	発表題目 (発表言語)	研究集会の名称 開催地 (都市名・国名)	研究集会会期 (本人発表日)
董 尚 (日本語教育学) 1年	漢語サ変動詞の自他性に関する研究 (日本語)	日本語教育と日本学研究国際シンポジウム 同济大学 (上海・中国)	2018年 5月11～13日 (5月12日)
張 政傑 (日本文化学) 3年	東亞「風雷」如何殘響?—日本「全共門 文學」與臺灣「保釣文學」的比較研究 (中国語/英語)	中華民国比較文學學會 第四十屆全國比較文學會議 台湾大学 (台北・台湾)	2018年 5月25～26日 (5月25日)
梶浦真由美 (国際コミュニケーション) 3年	The Effects of L2 Fast-rate Listening Training Combined with Transcript Reading and Brain Activity (英語)	24th Annual Meeting of the Organization of Human Brain Mapping サンテック国際会議展示場 (シンガポール)	2018年 6月17～21日 (6月20日)
王 侃良 (日本文化学) 3年	荻生徂徠における助字研究と『助語辞』 —比較的考察を中心に (日本語)	東アジア日本語教育・日本文化研究学会 第22回国際学術大会 大連大学 (大連・中国)	2018年 8月25日
Mukherjee Hiya (文化人類学) 1年	Customs and Beliefs in Japan and India through Comparative Study of Childbirth Rituals (英語)	7th International Conference on Knowledge, Culture and Society チャールストン大学 (サウスカロライナ州・アメリカ)	2018年 9月8～10日 (事情により 渡航中止)
江 俊賢 (日本言語文化) 4年	Insubordinated Conditional Clauses in Spoken Chinese: A Functional Typological Analysis (英語)	The 17th International Conference on the Processing of East Asian Languages and the 9th Conference on Language, Discourse, and Cognition 台湾大学 (台北・台湾)	2018年 10月19～21日 (10月19日)
游 書昱 (日本文化学) 2年	『新青年』、男の化粧、そしてモダンボーイ (日本語)	輔仁大学日本語文学科創立50周年・台湾 日本語学会創立30周年記念国際シンポ ジウム 輔仁大学 (新北・台湾)	2018年 12月15日

※本支援事業の採択者は、すべて博士後期課程 (当時) の学生である。

1-2 フィールド調査プロジェクト一覧 (2018年度)

氏名 (分野・専門) 課程※	プロジェクト題目	調査訪問機関 (所在地)	調査月
Hoang Thi Lan Phuong (日本語教育学) 前期	日本語二字漢字語の理解におけるベトナム語漢語の音韻類似性の影響	ホーチミン市師範大学 (ベトナム)	5～6月
川里 卓 (哲学) 後期	パリ国立図書館所蔵のメルロ＝ポンティ手書き草稿の調査と日本哲学との対比	ドイツ文学文書館 (マールバッハ・ドイツ)・ヒルデスハイム大学 (ドイツ)・国立図書館/INALCO (パリ・フランス)	9月
奥村華子 (日本文化学) 後期	1950～60年前後の炭鉱における文化運動に関する調査—福岡県筑豊地方と大牟田市を中心に	林えいだい記念ありらん文庫資料室/九州大学西新プラザ (福岡市)・八幡西生涯学習総合センター折尾分館 (北九州市)・水巻町歴史資料館 (遠賀郡)・石炭資料館 (田川市)・歴史資料館 (大牟田市)・国際日本文化研究センター (京都市)	9・12月
澤 茂仁 (映像学) 後期	近代ヨーロッパにおける映画と科学技術の交渉とその受容に関する調査	EYE Film Institute (アムステルダム・オランダ)	1月
Tinchurina Damira (言語学) 前期	日本語とウズベク語の謝罪表現・謝罪ストラテジーの異文化間比較—両国でのフィールドワークを通して	タシケント国立法科大学名古屋大学日本法教育研究センター/世界経済外交大学 (タシケント・ウズベキスタン)	8～9月
内田朋美 (文化人類学) 後期	宗教団体の社会貢献に対する意識と他団体との協働関係の可能性についての研究	認定特定非営利活動法人カリタス釜石/釜石市立図書館 (釜石市)	10～11月
王 毓茜 (日本語教育学) 前期	中国人日本語学習者における多義基本動詞の習得に関する一考察	上海外国語大学 (中国)	5～6月
山内良祐 (考古学) 前期	北陸における縄文時代の下呂石利用状況調査	富山県埋蔵文化財センター (富山市)・ふるさと歴史館 (野々市市)・石川県埋蔵文化財センター (金沢市)	11～12月
張 揚 (文化人類学) 前期	台湾のプロテスタント・キリスト教病院におけるキリスト教文化と医療従事者の宗教体験の聞き取り調査	中原大学宗教研究所 (桃園・台湾) / 嘉義キリスト教病院 (台湾)	5・11月

※本プロジェクトの採択者は、全て2年次(当時)の学生である。

日本語二字漢字語の理解におけるベトナム語漢語の音韻類似性の影響

Hoang Thi Lan Phuong 日本語教育学分野・専門 博士前期課程2年

研究目的と研究方法 ベトナム語と日本語は、漢語を共有しており、書字が異なっているものの、意味が同じ同義語が多い。語彙処理においては、母語の第1言語(L1)と学習対象の第2言語(L2)の両方の語彙項目が言語非選択的に活性化され、L1とL2の両言語の語彙使用頻度と音韻類似性が、L2の語彙処理に影響するかどうかを語彙性課題や翻訳課題の実験で検討した。

音韻類似性のデータベース 本研究は初めて日越両言語の音韻類似性を数値化し、データベースを作成した。音韻類似性は音韻的距離と音素類似性で計算した。語レベルの音韻的距離の平均は6.06(標準偏差、SD=2.52)、音素類似性の平均は0.5(SD=0.2)で、両指標の相関係数は0.92であった。

被験者 ホーチミン市師範大学外国語学部日本語分野のベトナム人日本語学習者38名を対象とした。平均年齢は23歳3ヶ月(SD=2歳2ヶ月)、日本語学習歴史の平均は5年と0ヶ月(SD=1年6ヶ月)であった。被験者の日本語の語彙の習熟度を測定するため、非漢字圏日本語学習者のためのテスト(大和・玉岡・茅本2016)を実施し、上位群(24名)と下位群(14名)を分けた。

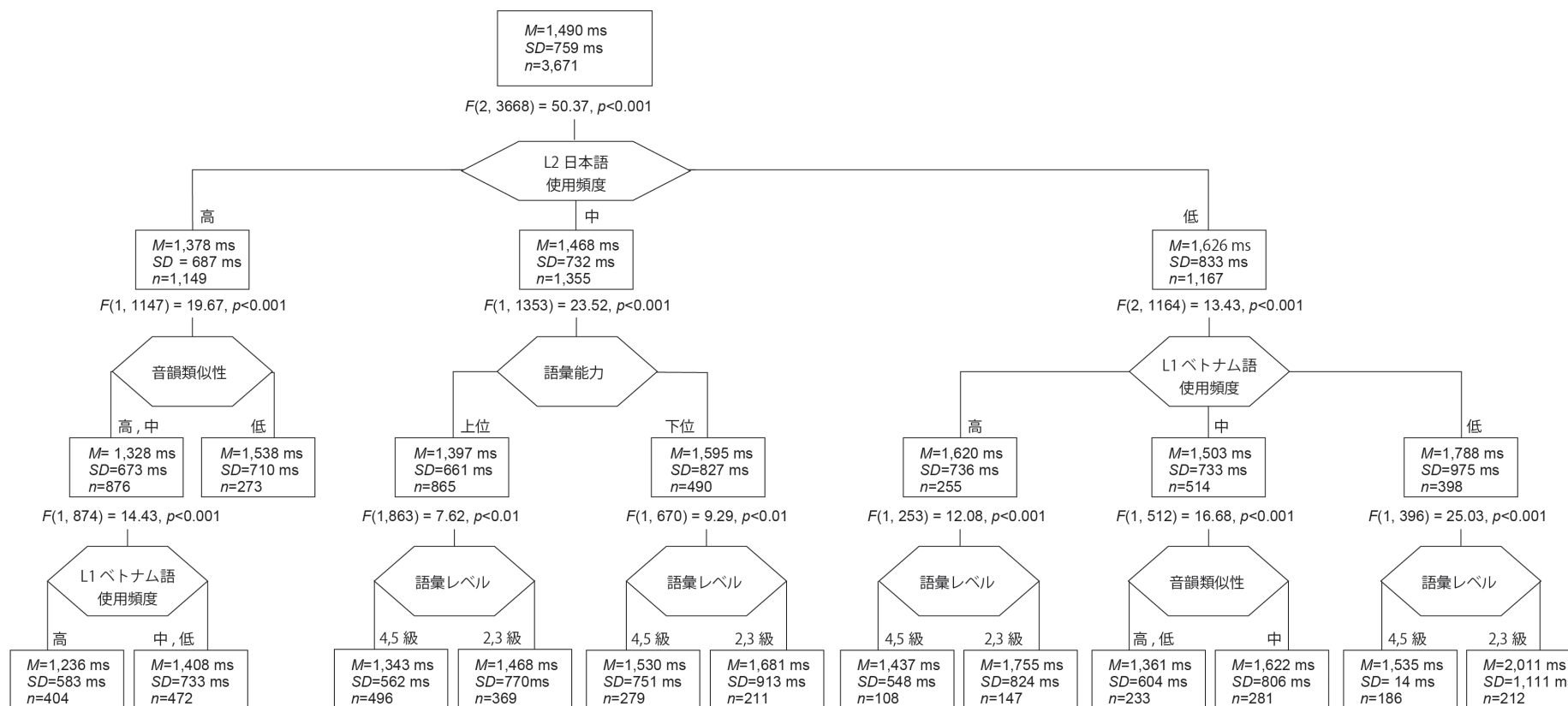
実験1 語彙性判断課題 決定木(重回帰)分析で解析した実験1の結果、正答率の平均は93.72%(SD=24.26%)、反応時間の平均は1,072ms(SD=614ms)であった。語彙使用頻度に関しては、L2日本語の使用頻度が語彙処理に強く影響した[F(2, 5337)=51.86, $p<.001$]。L2日本語の使用頻度が中程度の場合のみL1ベトナム語の使用頻度の効果が観察された[F(2, 3186)=11.68, $p<.001$]。学習者の語彙能力に関しては[F(1, 5338)=5.50, $p<.01$]、上位群の方が下位群よりも反応時間が短かった。さらに、上位群(反応時間の平均、 $M=1,057ms$, $SD=599ms$)と下位群($M=1,097ms$, $SD=638ms$)とも、L2日本語の使用頻度が活性化した。

実験2 翻訳課題 実験2の結果、正答率の平均は91.26%(SD=28.25%)、反応時間の平均は1,490ms(SD=759ms)であった。L2日本語の使用頻度は最も強い予測変数となり、日越両言語間の音韻類似性の効果も有意であった。図で示したように、日本語の漢字二字語をベトナム語に翻訳する際、L2日本語の語彙使用頻度が高い場合の日越両言語の音韻類似性がある程度高いL1ベトナム語の使用頻度が活性化され、それらの語彙の処理速度は非常に速かった。

考察 ベトナム語母語話者の日本語学習者により、L2日本語の漢字二字語を処理する際、日越両言語の音韻類似性と使用頻度の効果を検討した。L2日本語の漢字語を処理するため、やはりL2日本語の使用頻度が強い予測変数となるが、L1ベトナム語の使用頻度と日越両言語の音韻類似性の効果も見られた。これにより、ベトナム人日本語学習者が漢字二字語を処理する際、母語の知識を活性化して、語彙性判断課題と翻訳課題を遂行する反応時間に影響した。本研究では、日越両言語で言語非選択的に語彙を処理することが確認できた。さらに、非漢字圏のベトナム人日本語学習者のため、漢字語を習得する教授法及びカリキュラムの基礎的な研究資料として、日本語教育に貢献すると考えられる。

参考文献

- 大和・玉岡・茅本 (2016) 『ことばの科学』 **30**, 39-58.
 Almeida, J., Knobel, M., Finkbeiner, M., & Caramazza, A., (2007). *Psychonomic Bulletin & Review*, **14** (6), 1177-82.
 Dijkstra, A. T., & van Heuven, W. J. B., (2002). *Bilingualism: Language and cognition*, **5** (3), 175-197.



ベトナム人日本語学習者による漢字二字語の語彙認知処理に影響する各要因の関係

20世紀前半の芸術批評における身体性と有用性

川里 卓 哲学分野・専門 博士後期課程2年

本稿は、「パリ国立図書館所蔵のメルロ＝ポンティ手書き草稿の調査と日本哲学との対比」を題目として助成を受けた調査の報告である。そのなかで、今回の実際のフィールドワーク調査では、パリ国立図書館においてフランスの哲学者モーリス・メルロ＝ポンティおよびアンリ・ベルクソンの手書き草稿の資料調査を行った。

メルロ＝ポンティの草稿には著作権があり写真撮影を行えなかったが、刊行されていない資料をいくつか手書きで写すことができた。メルロ＝ポンティの資料に関しては、草稿の数が多いため全てを手書きで写すことは不可能であった。それゆえ、彼の主著である『見えるものと見えないもの』に所収されていない資料を中心にノートに書き写した。パリ国立図書館で収集した資料は、時間の都合上まだテキストデータに起こしていないが、現在の論文を執筆した後で、文字に起こし、今後の研究に生かしていく予定である。

また、ベルクソンの草稿に関しては、写真撮影が許可されていたため、彼自身が絶版とした著書『持続と同時性』、『道徳と宗教の二源泉』および『思考と動くもの』の資料を収集することができた。ベルクソンの草稿にはほとんど修正が見られず、彼がほぼ一気に著作を書き上げたという点を証明するものであった。

ただ、それでもいくつかの修正や削除した部分が存在しており、今回の調査では主にその箇所を写真で撮影した。例えば、『道徳と宗教の二源泉』では、「情動」について論じた箇所があるが、ベルクソンが本文から削除した箇所で、「情動」と「感情」を明確に区別している点を確認できた（これは出版された内容では明確に述べられていない）。

この調査の成果は、「情動」と「感情」について扱った論文にすでに反映されている（この論文は2018年度の中部哲学会の『年報』に投稿した）。また、ベルクソンの『思考と動き』に所収されている「ラヴェッソンの生涯と業績」の草稿に関する調査内容も、2018年12月8日に愛知学院大学で開催された、比較思想学会東海支部研究会の発表において、この論文の見解を支持するものとして用いた。

なお、助成対象の調査に先立つ2018年9月3日～4日は、別経費でドイツ・マールバッハにあるドイツ文学資料館において、ドイツの哲学者マルティン・ハイデガーに関する資料調査を行った。ドイツ文学資料館における調査では、一日半資料館に滞在した。そのなかで、ハイデガーの主著である『存在と時間』に関する、ドイツの哲学者ハンナ・アーレント宛の長い書簡の全文（22ページ）を手書きで写した。この調査の後、私はヒルデスハイムでの学会発表を控えていたため、この調査は発表前の日程で行った。また、助成対象の調査に引き続いて9月15日には、パリのINALCOにおいてフランス語で研究発表を行った。

1950～60年前後の炭鉱における文化運動に関する調査

——福岡県筑豊地方と大牟田市を中心に

奥村華子 日本文化学分野・専門 博士後期課程2年

はじめに 本プロジェクトでは、福岡県筑豊地方と大牟田市を中心に、炭鉱に関する手記・文集・サークル誌等の収集調査から文化運動の多様性を考察する。具体的には、従来看過されてきた在日朝鮮人労働者、炭鉱労働者家族の子どもによる活動を調査範囲に含め、1950～60年前後の炭鉱における文化運動の様相を明らかにすることを目的とするものである。

調査の背景 炭鉱労働研究において、従来労働に携わる当事者の問題は労働の面からのみ副次的に捉えられてきた。国家や各炭鉱の経営方針の対象として言及される動向に対して、近年領域横断的に注目を集めるのが1950～60年前後の炭鉱労働者自身による文化運動である。しかし先行研究では、主要な大手炭鉱を中心に、労働者らが一面的な集団として捉えられ、労働者間の階層性や、労働の当事者でない家族による活動は看過されている。本プロジェクトでは、炭鉱労働者と家族の書いた小説や詩、読者投稿、日記、手記などの調査とテキスト分析を行うことで、文化運動の担い手として、多様な炭鉱労働者と家族の姿を抽出する。

調査の概要 調査は以下の2回に分けて行った。

調査Ⅰ（期間は2018年9月6日～14日）：〈調査内容A・資料調査〉対象地：①記録作家 林えいだい記念ありらん文庫資料室、②水巻町歴史資料館、③田川市石炭資料館、④大牟田市歴史資料館、（すべて福岡県）。

〈調査内容B・意見・資料情報提供を受けるための勉強会出席〉：⑤筑豊・川筋読書会（福岡県にて開催）。

調査Ⅱ（期間は2018年12月22日～27日）：〈調査内容A・資料調査〉対象地：大牟田市歴史資料館（福岡県）、

⑥国際日本文化研究センター（京都府）。〈調査内容B・意見・資料情報提供を受けるための勉強会出席〉：

⑦原爆文学研究会、⑧「戦後文化運動に見る地方都市の光芒」勉強会（すべて福岡県にて開催）。

調査結果 調査Ⅰでは、①②③において在日朝鮮人労働者とその家族による文化活動を調査した。①は、福岡県筑豊地方をベースに朝鮮人炭鉱労働者に取材した記録作家林えいだいの遺品を所蔵しており、林による取材ノート等の未解析資料を得た。また②③では、日本炭鉱高松鉱業所近辺を中心に、鹹首や閉山によって炭鉱住宅を追われた在日朝鮮人労働者らが多く居住した場所のおおよその位置を把握した。また、④では三池炭鉱のあった大牟田市で発刊されたサークル誌や小学校が発行していた文集の調査を行い、39点を確認した。⑤では、火野葦平資料館館長坂口博氏の協力により、炭鉱のサークル運動に深く関わった谷川雁や石牟礼道子に関する知見や資料を提供いただいた。調査Ⅱでは、調査Ⅰの際に時間的制約によって閲覧、複写のできなかった資料を補足収集し、⑥では、炭鉱の文化運動と比較するための全国の職場で生じた文化運動に関する資料を調査した。また、⑦では被曝後に炭鉱の文化運動に携わった上野英信に関する知見や資料を提供いただいた。また⑧の科研費採択課題研究会の協力を受け、労働者主導の運動と比較するため企業が主導した文化運動に関する知見と、八幡製鐵所が発刊し、現在入手困難な『製鉄文化』を提供いただいた。

考察と今後の展望 今回の調査では、在日朝鮮人労働者によるコミュニティと独自のネットワークの存在の一端が明らかになった。また、労働の当事者ではない子どもらの活動では、両親の労働が強く意識されており、サークル誌の執筆を通して「炭鉱労働者の子ども」としての自己認識が形成されていく様相が明らかになった。今回の調査を基盤に、炭鉱労働者間の国籍や出身地による階層差や待遇の差から生じる文化運動とその交渉関係、また職住一体の労働環境において生成される労働者の家族らによる文化運動を論究し、炭鉱という労働が人々に与えた影響を多面的かつ立体的に考察していくことを、博士論文の展望としたい。

近代ヨーロッパにおける映画と科学技術の交渉とその受容に関する調査

澤 茂仁 映像学分野・専門 博士後期課程2年

このフィールド調査プロジェクトはオランダ・アムステルダムのEYE Film Institute(以下ではEYEと略記)にて実施された。EYEは、シネマテーク・フランセーズ(仏)やBFI(英)などとともに、ヨーロッパでも有数のフィルム・アーカイブ機関とされている。同機関は大きくふたつに分かれる。上映や展示をおこなう博物館(本館)と、フィルムおよびノン・フィルム・マテリアル(フィルム以外の一次資料全般)の保管とその研究をおこなうアーカイブ棟(別館)、である。今回は主に後者を利用した。具体的には、数人のフィルム・アーキビストに協力を仰ぎつつ、その棟内の「EYE study」なる研究用デスク(要予約)で映画作品の鑑賞と一次資料の調査にあたった。ここでは紙幅の関係で作品鑑賞について述べることにする。

鑑賞の対象としたのは、EYE所蔵の貴重な科学フィルム、とりわけ初期からサイレント期(1900年代前半～1920年代後半)にかけて製作された顕微鏡フィルムとX線フィルムだ。今回の調査では、合わせて約20本の作品を鑑賞することができた。この本数は日本ではおよそ考えられないほど多いといえよう。というのも、フィルム残存率(全体の製作本数に対してフィルムがどれくらい残っているかを示す数値)の低さゆえに、日本国内にはそれらのフィルムがほとんど現存していないからだ。少なくとも同時期に限れば、新たに発見でもされないかぎり鑑賞にあたるのはきわめて難しい。また、鑑賞に加え、50本近くの作品情報(タイトル、年、国、監督、フィルムフォーマット、上映時間、検索キーワード)をリスト化する作業もおこなった。鑑賞したなかからそれぞれ数本ずつ挙げるなら、顕微鏡フィルムには、*Malaria* (1921, NL, 不明, 「マラリア」)、*Wonderen der Naturr: Unit het Rijk der Kristallen* (1927, NL, J. C. Mol, 英題 From the Realm of the Crystals Part I and II)、*Zwerftochten door en Waterdruppel* (1929-32, NL, J. C. Mol, 英題 Wonderings through a Waterdrop)などが、一方のX線フィルムには、*Duitse Nood* (NL, 1920, 不明, 「ドイツの苦悩」)、*Röntgenstralen* (FR, 1923, 不明, 「レントゲン線」)、*Het Wonder der X-stralen* (1924, FR, 不明, 英題 The Miracle of X-rays)などがある。この際、同機関の強みであるデジタルアーカイブを積極的に活用するよう努めた。デジタルならば、検索で容易に作品へアクセスできることはもちろん、自らの判断で自由に停止や巻き戻しの操作ができるため、テキストをショット単位で精緻に記述し分析できるという利点がある。映写技師によるフィルム上映ではこうはいかない。

それらの作品には、観察者(男性科学者)と被験者(女性・子ども)の関係性、時間一運動一プロセスの強調、機械装置の強調、超クロスアップとその他のショットサイズの分析的編集、写真と映画という二つのメディアの併用、高速度撮影の使用、日常性など、興味深い主題や表現が多数見られた。また、映画会社Multifilmと科学者J. C. Molの重要性も判明した。日本の初期からサイレント期(1900年代前半～1920年代後半)における映画言説では、豊洲散土、梅屋庄吉、吉山旭光、権田保之助、寺川信、小路玉一、寺田寅彦といった面々が、フランスの科学者Jean Comandonをはじめとする顕微鏡フィルムおよびX線フィルムに着目しており、その文脈は見世物、芸術、科学、衛生、学術(教育、観察、実験etc.)ときわめて多岐にわたる。今後はそれらを含めて比較映画史的な読解に駒を進めたい。

※作品表記について：作品名(製作年、製作国、監督)

日本語とウズベク語の謝罪表現・謝罪ストラテジーの異文化間比較 ——両国でのフィールドワークを通して

Tinchurina Damira 言語学分野・専門 博士前期課程2年

研究の背景 人間は日常生活の中で様々な発話行為を行っている。例えば「感謝、依頼、勧誘、命令」等の機能を担う表現である。言語学や社会言語学の観点からみると、謝罪や謝罪を伴う言語行動も頻繁に行われている。本研究では日本語とウズベク語における謝罪の発話行為、両言語話者が使用する謝罪ストラテジーについて対照研究を行う。

本研究の目的 本論文では日本人とウズベク人が謝罪する際に用いられるストラテジーの対照分析を行う。本研究の被調査者は日本語母語話者、ウズベク語母語話者、ウズベク人日本語学習者という三つのグループからなる。具体的には各グループの話者が最もよく扱っている謝罪ストラテジーと各謝罪場面で各グループが使用する謝罪ストラテジーにはどのような相違があるのかを明らかにすることを目的とする。

本研究の調査方法と調査場面 本研究では、日本語母語話者 (JN) 92人、ウズベク語母語話者 (UN) の大学生と大学院生40人、ウズベク人日本語学習者 (JFL) の大学生と大学院生40人、合計172人を対象に、DCTの自由記述のアンケート調査を通して、データを収集した。本研究の場面設定に関しては、日本人とウズベク人の日常生活の中で謝罪行動が想定されやすい12の場面を設定した。本研究ではDCTのアンケート調査の各場面对して被調査者に謝罪をすかどうかの選択肢に加えて、被調査者には「謝らない」選択肢も与え、その理由について書いてもらうこととした。DCTのアンケート調査は大学の講義中に配布し、集団で実施した。これまでの先行研究では、謝罪表現・ストラテジー等は話者同士の年齢・性別・社会地位等の差異等によって相違が生じることが指摘された。従って、本研究でもDCTを行う前に、被調査者に研究の《Background Characteristics》を記入してもらった。《Background Characteristics》は年齢、性別、学歴等の情報を含んでいる。

分析結果 3つのグループの被調査者達の、場面1から場面12における発話を分析したところ、単独ストラテジーよりも組み合わせのストラテジーの使用傾向が高かった。具体的にいえば、JNグループでは、合計86種類の謝罪ストラテジー、1104の謝罪発話数が見られた。JFLグループでは、64種類の謝罪ストラテジー、480回の謝罪の発話数が見られた。UNグループでは、53種類の謝罪ストラテジー、480回の謝罪発話数が見られた。

本研究で、被調査者に使用された謝罪ストラテジーは、相手との親疎関係つまり(1)教授、(2)見知らぬ人、(3)友達等の要素によって異なることが明らかになった。また、今回の調査では、3つのグループ間で使用されたストラテジーの種類は多様だが、「謝罪の定型表現」が単独や組み合わせの形等で多く用いられるという類似性が見られた。全場面合わせて、JNグループで217回、JFLで69回、UNで56回使用されたことが明らかになった。そして、各場面においてJN、JFL、UNグループにおける男女による謝罪表現の違いについて分析したところ、JFLとUNグループでは男女による差がなく、JNグループのみで謝罪表現の使用法に男女差が見られた。全場面に合わせてUNグループは他のグループと違い、謝罪する際に最初に犯した過失の理由を説明して、過失が故意ではない気持ちや意向をはっきり伝えること、或いは謝罪しない傾向が見られた。最後に、今回の調査では、定められた謝罪は同じ場面において決まった形式のストラテジーではなく、多様なストラテジーを組み合わせ使用されることが明白になった。両言語のストラテジーの多様性は謝罪発話行為における言語行動のスタイルが異なることを意味すると推測できる。

被災者支援における宗教団体の協働関係構築の経緯と傾向についての調査

内田朋美 文化人類学分野・専門 博士後期課程2年

本稿は、「宗教団体の社会貢献に対する意識と他団体との協働関係の可能性についての研究」を題目として助成を受けた調査の報告である。

調査の概要 東日本大震災において、多くの宗教者や宗教団体が支援活動に従事し、宗教宗派の境界を越えて互いに協力していた。本研究は、被災地にて支援活動を行う宗教団体が民間団体や行政、他宗教・宗派の宗教団体とどのように協働関係を形成したのか、その相関関係や特徴を明らかにすることを目的としている。本稿では紙幅の都合上、協働関係の形成過程と実態を報告するにとどめるが、今後は調査対象と範囲を広げるとともに、協働が機能した背景や条件についても考察を試みたい。

調査対象・方法 岩手県釜石市において支援活動を行っていたキリスト教関連団体二つと、仏教団体二つ、釜石市社会福祉協議会の現地責任者に対してインタビューを行った。

宗教団体と他団体との協働関係の構築過程と実態 本プロジェクトの助成により、釜石市立図書館に所蔵された震災関連の資料を収集し、上記の団体にインタビューを行うことができた。今回調査した宗教団体、宗教関連団体には、地元の聖職者や信者が中心となり被災者支援を始め、資金や物資、人材といった側面で母体である宗教団体が協力した団体と、県外の宗教者や信徒が中心となり被災地支援を行う目的で自主的に遠征してきた団体と二種類あるということがわかった。後者には、被災地に拠点を置かない遠方からの通いであったため、現地の他団体との協働が困難であった団体もある。しかしながら、どの団体も初期の頃から積極的に社会福祉協議会へ協力していく方針でいた。災害時にボランティアを取り纏め、被災者のニーズや行政の動きを把握しているのは社会福祉協議会であり、そこに繋がることで被災者に寄り添った支援を行うことができると考えたからである。一方、民間団体や他の宗教団体との協働は、被災者支援に向いた避難所や仮設住宅で出会い、2011年後半に結成した「お茶っこサロン連絡会」で交流することによって自然と成立した。団体によっては、イベントを共同開催するだけでなくボランティアや物資などその時々互いに足りないものを補い合うこともあったという。支援活動を行う聖職者や信徒の個人的な知り合いからの紹介や協力要請も大きな割合を占める。その他、社会福祉協議会や行政から他県の団体との協働を頼まれることや、現地に拠点を持たない団体が宗教関連団体へ直接協力を要請してくることもある。

「お茶っこサロン連絡会」とは 社会福祉協議会に協力して支援活動を行っている団体が集まり、地域住民に必要な支援を具体的に話し合い、活動方針や情報を共有する場である。震災直後から活動する支援団体と社会福祉協議会、双方の求めにより結成することになった。初期から宗教団体、宗教関連団体が多く所属していた。最初は情報交換を行う場であったが、同じ目的を持った緩やかな共同体として重要な役割を果たすようになる。

中国人日本語学習者における多義基本動詞の習得に関する一考察

王 毓茜 日本語教育学分野・専門 博士前期課程2年

はじめに 多義語は「同一の音形に、意味的に何らかの関係を持つ二つ以上の意味が結び付いている語」(国広1982: 97)と定義づけられ、日本の大学及び大学院で学ばいわずに学習に成功した上級日本語学習者にとっても、習得の難しい項目であるとされている。本研究は先行研究を踏まえ、中国で日本語を外国語とする学習環境(以下「JFL環境」と記す)の中国人日本語学習者(以下「CJL学習者」と記す)の多義基本動詞派生義の習得において、①多義動詞派生義の透明性がどれほど高いと考えられるか、②学習者の派生義意味理解に影響する要因は何か、という2つの研究課題を明らかにすることを目的とする。

調査の概要 報告者は2018年5月から6月にかけて、中国の上海外国語大学にて3つのテストとフォローアップインタビュー調査を行った。調査対象者は、上海外国語大学の日本語学科に在学している中国人日本語学習者(学部2年生～大学院2年生)計20名である。研究課題1については、麻生(2014)を参考に、透明性テストとフォローアップインタビューを実施し、対象語の派生義のCJL学習者にとっての透明性を検討した。研究課題2については、調査協力者の日本語語彙能力を測定するための語彙能力テスト(宮岡・玉岡・酒井2011)及び、対象語の意味理解の程度を測るための意味理解テストを実施した。その後、学習者の第一言語である中国語に対応する語における共通している語義の有無、意味拡張関係の種類、意味拡張の回数と学習者の日本語語彙能力の4つを要因として設定し、決定木分析を用いて検討した。

考察 その結果、まず、JFL環境での中国人日本語学習者にとって、中国語と共通している語義がある派生義は中国語と共通している語義がない派生義より透明性が高い傾向が見られ、透明性の高低はその派生義の意味拡張関係の種類と密接に関係しており、メトニミーに基づき拡張された派生義はメタファーに基づき拡張された派生義より透明性が高いことが示された。また、多義語派生義の透明性は語固有の性質であり、透明性の高低は意味拡張関係の種類と密接に関係していることが示された。

そして、JFL環境での中国人日本語学習者の多義語派生義の意味理解に影響する要因として、中国語と共通している語義の有無、意味拡張関係の種類、意味拡張の回数の3つがあげられる。その中で最も強い要因となったのは中国語と共通している語義の有無であり、中国語と共通している語義がある場合、学習者の日本語語彙能力にも関わらず、全般的に理解度が高い。その一方、中国語と共通している語義がない場合、学習者の意味理解は派生義の意味拡張関係の種類に強く影響され、シネクドキー>メトニミー>メタファーの順に理解度が高い傾向が見られた。

参考文献

- 麻生迪子(2014)「多義語派生義の学習法に関する考察—学習活動・習熟度・透明性の観点から韓国人日本語学習者を対象にして—」九州大学大学院比較社会文化学府博士学位論文。
 国広哲弥(1982)『意味論の方法』大修館書店。
 宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘(2011)「日本語語彙テストの開発と信頼性」『広島経済大学研究論集』34(1), 1-18.

北陸における縄文時代の下呂石利用状況調査

山内良祐 考古学分野・専門 博士前期課程2年

本報告書は2018年度名古屋大学大学院人文学研究科フィールド調査プロジェクトによる助成のもとで行った「北陸における縄文時代の下呂石利用状況調査」の成果を述べるものである。

縄文時代の石器に用いられる石材には広範囲で利用されているものがある。このような石材は自然の力のみで広範囲に拡散したとは考えられず、そこには人の手による運搬という力が働き、石材が移動していると考えられる。東海地方を中心として石鏃などの利器に用いられていた下呂石もそのような石材のうちのひとつである。下呂石とは岐阜県下呂市で産出するガラス質の岩石であり、東海を中心として石鏃など小型剥片石器に多く用いられている石材である。この下呂石は河川などの自然の力が及ぶ範囲を越えて利用されており、今回対象とした北陸もそのような地域である。このような地域の状況を調査し、石材利用状況を検討することにより、当時の地域間関係、そして社会について復元を試みる。

今回は肉眼観察により対象遺物の石材判別を行い、遺跡ごとの石材利用割合の分析や、流入形態の検討を行った。具体的には境A遺跡（富山県朝日町）、米泉遺跡（石川県金沢市）、御経塚遺跡（石川県野々市市）、小杉遺跡（石川県加賀市）から出土した資料を実見し石材判別を行った。また、下呂石製の石器を観察し、流入形態の推定が可能な特徴を持つものの分析を行った。

今回の調査結果として、東海の中でも特定の地域との関係をうかがうことのできる資料を確認することができた。下呂石製の石器のうち、人工的に剥がされたものでなく自然状態の面を残すものがある。このような面を原礫面といい、原礫面を観察することでおおよその産出地を推定することができる。北陸で確認した下呂石の原礫面は産出地付近ではなく濃尾平野付近で採集されたものと推定され、北陸地方と濃尾平野との関係性がうかがえる（図1）。



図1 原礫面を持つ下呂石剥片

また、東海地方に特徴的な石鏃の出土を確認することができた。東濃が分布の中心であると考えられる部分磨製石鏃（図2）と下呂石原産地付近で製作された可能性のある有茎長身鏃（図3）を今回の調査において確認した。これらの石器は確実に製品となったものが運ばれたとはいいがたいが、下呂石との関連が強く遺跡内で製作されたと考えにくいいため、東海で製作された石鏃が当時の北陸において大きな力を持っていた御経塚遺跡などに持ち込まれた可能性が考えられる。

今回の調査では、縄文時代における東海と北陸の関係を考察するうえで重要な証拠となりうる資料を確認することができた。しかし、今回の調査のみでは十分ではなく、今後さらなる資料集積を続けていく必要がある。



図2 下呂石製部分磨製石鏃



図3 下呂石製有茎長身鏃

謝辞 今回の調査におきましては、富山県埋蔵文化財センター岡本淳一郎氏、石川県埋蔵文化財センター山川史子氏、野々市市教育委員会腰地孝大氏には資料見学上の便宜や多くのご教示を賜りました。末筆ながらお名前を明記して謹んでお礼申し上げます。

台湾のプロテスタント・キリスト教病院における キリスト教文化と医療従事者の宗教体験の聞き取り調査

張 揚 文化人類学分野・専門 博士前期課程2年

調査背景 台湾はかつて、「瘴癘の地」と呼ばれ、地理・気候的には亜熱帯に属し、高温多湿のため病気が発生しやすい地域だと思われていた。杜聡明（1959）によると、台湾の医療発展は、五つの時期、つまり「原始医学時代」「瘴気医学時代」「教会医学時代」「日治医学時代」「中華民国医学時代」に分けられる。その中で、「教会医学」、即ち台湾のキリスト教医療は、19世紀半ばに、イギリスとカナダの長老教会の宣教師によって、それぞれ台湾南部と、北部、中部を中心に行われていた「医療伝道」(Medical Missionary)から始まった。戦後、キリスト教プロテスタントの各主流教派が台湾に伝えられ、キリスト教病院の創設が盛んになった。本調査では、アメリカルーテル会の医療宣教師 Dr. Ditmanson によって設立された嘉義キリスト教病院 (CYCH) を中心に、病院の歴史文化及び医療・宗教活動、医療従事者の宗教体験などに関して聞き取り調査を行った。

調査目的 本調査の結果は調査者の修士論文の一部である内部者視点研究の基盤となる。修士論文では、台湾嘉義地域のキリスト教医療を構成する CYCH を事例に、人類学的アプローチから病院のエスノグラフィを作成する。その元となる本調査では、CYCH に存在しているキリスト教活動に参加観察し、医療従事者に対する聞き取り調査を通して資料の収集を行う。現地調査により、CYCH のキリスト教医療文化の特徴、及び医療従事者、患者にどのような役割を果たしたのかを明らかにする。

方法 本調査で、調査者は2018年5月7日～15日、2018年11月11日～17日の間に2回の現地調査を実施した。一回目は、CYCH でキリスト教信者のセルグループ活動及びスピーチ大会などに参加観察した。また、合計7名の医療関係者、研究者及びチャプレンのライフストーリーに関わる聞き取り調査を行った。二回目は、主に1987～2018年の約30年間の病院成長期の発展に寄与した2名の元院長W氏とC氏、シニアスタッフと理学療法士各1名に対してインタビュー調査を行った。それに加え、病院のキリスト教活動を5回にわたり参加観察した。

考察と結果 CYCH のキリスト教医療文化の中には、「全人的ケア」の特徴が見られ、医療従事者に「癒し」(healing) の機能を果たしていた。CYCH の「癒し」は、病院の「全人的ケア」(holistic care) と結びついて行われている。CYCH は病院、嘉義地域、さらにタイとフィリピンの海外地域という3つのコミュニティで、医療関係者、患者、及び地域の住民のニーズに合わせ、「癒し」に繋がる医療的、宗教的ケアを提供している。CYCH はコミュニティの医療化と福音化の担い手となっている。本調査では、主に病院のチャプレン部活動を参加観察してきた。医療従事者に対して、チャプレン部はセルグループの「癒し」を通して、彼らの全人的なニーズを満たし、仕事や生活においてより健康的な状態を作り出している。患者に対して、病室の巡回ケア、緩和・ホスピスケアを提供し、患者の精神的苦痛に「癒し」を与えている。同時に、「癒し」によって、両者を信仰の道に導くようにする。内部者の視点から見れば、CYCH の「癒し」は、キリスト教の、精神的に救われる「癒し」に繋がり、コミュニティの「健康的」福音化という理念に内包されている。

参考文献

杜聡明 (1959) 『中西医学史略』



図1 嘉義県、嘉義市
(出所：Google Map)

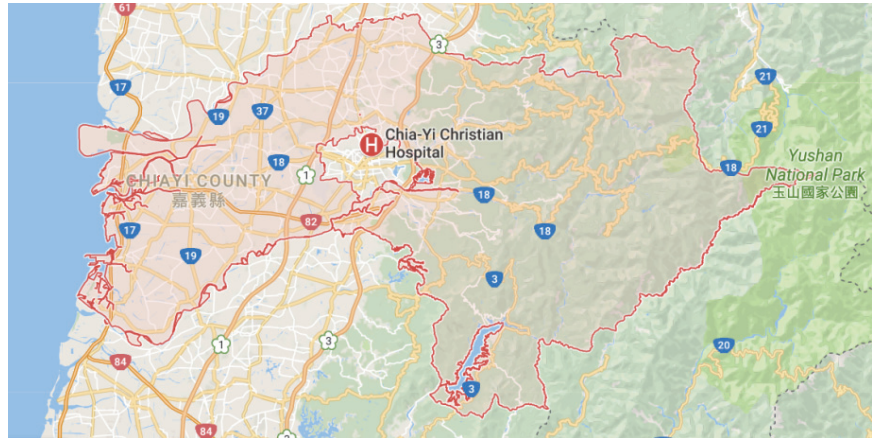


図2 CYCHの位置
(出所：Google Map)

表1 CYCHで働くスタッフや医療関係者の信仰状況

	プロテスタント	カトリック	道教	仏教	一貫道	ほか	データなし
比率	15.4%	1.1%	29.1%	9.6%	0.9%	26.6%	17.2%

(チャプレン部『2018年全院共識宮問巻調査報告』の内容に基づき筆者作成)

表2 CYCHの医療従事者、スタッフ及びその家族の洗礼と「信仰の告白」

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
洗礼	9人	6人	10人	2人	13人	10人
信仰の告白	22人	39人	57人	19人	170人	61人
活動参加者	2031人	2310人	6701人	7303人	6389人	8598人

(チャプレン部の報告書内容に基づき筆者作成)

表3 CYCHの入院患者の洗礼と「信仰の告白」

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
洗礼	8人	8人	9人	8人	6人	13人
信仰の告白	55人	109人	84人	81人	141人	111人

(チャプレン部の報告書内容に基づき筆者作成)

聞き取り調査のインフォーマント

- 元院長 WRH 氏： 60代後半、男性、1987～2000年
- 元院長 CCR 氏： 60代後半、男性、2000～2018年
- LLS 氏： 70代、男性、シニアスタッフ、CYCHに50年
- CGF 氏： 50代、女性、シニアスタッフ、CYCHに30年
- XYZ 氏： 30代、女性、一般外科医師、CYCHに4年
- CKH 氏： 30代、男性、整形外科医師、CYCHに4年
- LMZ 氏： 40代、女性、臨床検査技術部主任、CYCHに25年
- YLC 氏： 20代、女性、超音波診断師、CYCHに3年
- HCJ 氏： 20代、女性、理学療法士、CYCHに3年

2. 教育研究推進室主催の行事 (FD・ワークショップ・その他) (2018年度)

年月日	発表者	題目・概要等
2018年4月19日	楊佳嘉・松山由布子・木村可奈子	日本学術振興会特別研究員応募説明会
2018年11月15日		日本学術振興会特別研究員候補者模擬面接
2018年12月12日	三輪晃司	人間を対象とした調査・実験の研究倫理—心理言語学の立場から (第2回教育研究推進室主催ワークショップ)
2019年1月16日	古尾谷知浩・星野幸代・宮地朝子・西川智之	第1回自己紹介の会 (第3回教育研究推進室主催ワークショップ)
2019年3月12日	Hoang Thi Lang Phuong・川里卓・奥村華子・澤茂仁・内田朋美・Tinchorina Damira・山内良祐・張揚	フィールド調査プロジェクト報告会 (第4回教育研究推進室主催ワークショップ)

Ⅱ 人文学研究科の教育・研究活動

1. 教員の著書（単著）一覧（2018年度）

著者	書籍名	出版社	発行年月
大室剛志	動詞と構文	研究社	2018年8月
塩村 耕	(村上忠順叢書第十九) 忠順翁の手紙を読む 四	村上忠順翁顕彰会	2019年2月
藤木秀朗	映画観客とは何者か—メディアと社会主体の近現代史	名古屋大学出版会	2019年2月

2. 教員の自著紹介

大室剛志『動詞と構文』研究社

研究社から刊行された全10巻からなるシリーズ「英文法を解き明かす—現代英語の文法と語法」は、英語語法文法学会が2012年に設立20周年を迎えたのを期に、学会で培われてきた活動成果を広く社会に還元すべく、出版を企画したものである。本書は、そのシリーズの第2巻にあたり、本書のタイトルは「動詞と構文」である。

本書の目的は、英語のどの構文1つを取り上げてみても、そこには基本形、いわば典型的なメンバーと、その典型からずれた変種が存在するというを、英語の自動詞構文(第2章から第4章)と他動詞構文(第5章から第8章)をいくつか具体的に取り上げて、実証的に示すことである。

本書の構成は以下の通りである。

第1章では、「基本形と変種」と題し、構文を扱う前に、英語の動詞 climb を取り上げ、構文よりは小さな、しかし、同様に言語の基本的な単位の1つである単語の意味にも、基本と変種が存在することを確認している。続いて、「自動詞と構文」、「他動詞と構文」を扱う前に、英語の関係節構文を取り上げて、そこにも基本形と変種が存在することを確認している。

第2章から第4章では、「自動詞と構文」を扱っている。基本的に自動詞である動詞が用いられている構文として、第2章では同族目的語構文(例えば、Dr Gerard smiled a quick comprehending Gallic smile.)、第3章では動作表現構文(例えば、Miss Marple nodded agreement.)、第4章では One's Way 構文(例えば、Rusty vehicles belch their way around the pot-holed streets.)を取り上げて、それらの構文に基本形と変種が存在することを実証的に示している。

第5章から第7章では、「他動詞と構文」を扱っている。第5章では、使役構文(例えば、Bill caused Harry to die on Tuesday by giving him poison on Monday.)を取り上げ、使役構文で用いられる動詞の性質(例えば、force(無理に～させる)、prevent(無理に～させない)、pressur(圧力をかけて～させようとする)、impede(～するのを妨害する)、help(～するのを助ける)、let(～するようにさせておく)、drag(ひきずる)、throw(投げる)、constrain(～させないようにしている)、frighten(怖がらせる))からして、様々な使役構文が存在することを示している。第6章では半動名詞構文(例えば、Masao was spending his vacation working at the Matsumoto factory in Tokyo.)を、第7章では他動詞が使用される You scared the living daylight out of me. に代表される構文イディオムを、第8章では d'rather が節を直接従える構文(例えば、I'd rather you didn't say anything at all than be dishonest.)を取り上げ、そこにも基本形と変種が存在することを実証的に示している。

第9章では、それまでの「自動詞と構文」、「他動詞と構文」の実証的な研究を基に、文法の核と周辺、構文の核と周辺について論じている。

本書全体を通じて、語の意味の基本と変種、構文の基本形と変種ということが解明されてくると、その副産物として、「基本的な事項から高度な事項へ」という文法事項の配列順序の決定に関する原則に客観性を与えるという形で、英語学における研究が英語教育にも貢献できることが示されている。

本書に関しては、雑誌『英語教育』(2019年1月号92ページ、大修館書店)において、神戸大学人文学研究科言語学教授岸本秀樹先生による「本書で展開されている考察では、英語に関するさまざまな興味深い事実が明らかにされており、ことばのダイナミックな側面が見事に浮き彫りになっている。」との書評が既になされている。

藤木秀朗『映画観客とは何者か——メディアと社会主体の近現代史』名古屋大学出版会

映画観客は、20世紀初めからおよそ100年間にわたる日本の近現代史の中で、社会主体として行為し想像されてきた。本書では、映画観客と「民衆」「国民」「東亜民族」「大衆」「市民」との結びつきを分析することにより、メディアと社会主体の関係史を描き出している。

「民衆」「国民」「東亜民族」「大衆」「市民」は、歴史的な文脈の中で生み出されてきたカテゴリーであり、アイデンティティであり、社会主体である。これらの言葉はそれぞれ、ある時代に頻繁に使われた一方で、別の時代にはあまり使われないということがあった。映画観客との関わりに限っておおよその傾向を言えば、「民衆」は1910年代から20年代にかけて、「国民」は30年代から2010年代の現在に至るまで、「東亜民族」は1930年代後半から40年代前半まで、「大衆」は20年代終わりから60年代まで、「市民」は60年代から2010年代の今日に至るまでに流通した言葉だった。見てのとおり、この歴史は単線的ではなく、複層的である。しかも、それぞれの時代には資本主義、総力戦、帝国主義、民主主義、冷戦体制、リスク社会、新自由主義、ポストフォーディズム、コントロール社会といった、歴史に大きく作用してきた数々の問題系が絡んでいる。こうした中であって「民衆」「国民」「東亜民族」「大衆」「市民」といった言葉は、いずれも辞書的に定義された固定的で普遍的な意味として使用されたわけではなく、むしろそれぞれが多様な立場の言説によって言及され意味づけられながらある程度のずれや矛盾を含みもち、なおかつ歴史的な文脈とともにそれぞれの意味合いを変容させてきた。また、それらの概念は、他者を表象する言葉として使用される場合もあれば、自己を定義する言葉としても使用されてきたし、さらには単に言葉として言及されるだけでなく、行為として遂行されてきた側面もある。したがって、「民衆」「国民」「東亜民族」「大衆」「市民」はいずれも、単なるステレオタイプ的な集団カテゴリーでもなければ首尾一貫したアイデンティティでもなく、歴史的な文脈の中で生成した、ある程度流動的で、多様で、複雑で、矛盾した意味合いを持ち合わせた社会主体だと言える。映画観客は、社会から完全に切り離された存在ではなく、むしろそうした歴史的な文脈にある社会主体として捉えることができるのである。

言うなれば、本書は、映画観客を、そうした歴史に規定されると同時に歴史を動かす社会主体として捉えることで、映画観客の、さらにはより大きくメディアと社会主体の、重層的な近現代史のダイナミズムを実証的かつ分析的に浮かび上がらせる試みである。構成としては本書は、「民衆」「国民」「東亜民族」「大衆」「市民」を各テーマに全5部（全8章）、680ページから成っている。

Ⅲ 各種データ

1. 教育の現況

1-1 教育プログラムの構成

資料1 人文学研究科の学位プログラム・コースと分野・専門

学位プログラム	コース	分野・専門
言語文化系	文芸言語学	言語学、日本語学、日本文学、英語学、英米文学、ドイツ語ドイツ文学、フランス語フランス文学、中国語中国文学、日本語教育学、英語教育学、応用日本語学
	哲学倫理学	哲学、西洋古典学、中国哲学、インド哲学
歴史文化系	歴史学・人類学	日本史学、東洋史学、西洋史学、美学美術史学、考古学、文化人類学
	総合文化学	映像学、日本文化学、文化動態学、ジェンダー学
英語高度専門職業人	英語高度専門職業人	
多文化共生系	国際・地域共生促進	

資料2 文学部のコースと分野・専門 (2017年度以降)

コース	分野・専門
文芸言語学	言語学、日本語学、日本文学、英語学、英米文学、ドイツ語ドイツ文学、フランス語フランス文学、中国語中国文学
哲学倫理学	哲学、西洋古典学、中国哲学、インド哲学
歴史学・人類学	日本史学、東洋史学、西洋史学、美学美術史学、考古学、文化人類学
環境行動学	社会学、心理学、地理学

1-2 教員数・学生数

資料3 人文学研究科教員の年齢別、男女別構成 (2018年度、5月1日現在)

	男性	女性	計
20歳代	0	0	0
30～34歳代	1	2	3
35～39歳代	3	2	5
40～44歳代	9	5	14
45～49歳代	12	6	18
50～54歳代	15	12	27
55～59歳代	15	4	19
60～65歳代	20	3	23
計	75	34	109

出典：文系総務課記録

資料4 人文学研究科の学生定員と現員 (入学者数推移) (各年5月1日現在数)

	前期1年		前期2年		計		後期1年		後期2年		後期3年		計	
	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数
2017年度	104	108	—	—	104	108	61	53	—	—	—	—	61	53
2018年度	104	113	104	105	208	218	61	49	61	53	—	—	122	102

出典：文系教務課記録

資料5 文学部の学生定員と現員 (入学者数推移) (各年5月1日現在数)

	1年		2年		3年		4年		計	
	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数
2015年度	125	135	125	140	135	145	135	166	520	586
2016年度	125	131	125	142	135	144	135	184	520	601
2017年度	125	133	125	141	135	144	135	172	520	590
2018年度	125	134	125	142	135	141	135	171	520	588

出典：文系教務課記録

資料6 社会人学生受入状況 (大学院)

	博士課程 (前期課程)			博士課程 (後期課程)		
	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数
2017年度	14	3	3	20	14	13
2018年度	17	6	6	21	10	9

出典：文系教務課記録

資料7 留学生受入状況 (大学院)

5月1日現員	前期課程1年			前期課程2年			合計		
	私費	国費	計	私費	国費	計	私費	国費	計
2017年度	63	2	65	—	—	—	63	2	65
2018年度	63	7	70	61	2	63	124	9	133

5月1日現員	後期課程1年			後期課程2年			後期課程3年			合計		
	私費	国費	計	私費	国費	計	私費	国費	計	私費	国費	計
2017年度	15	3	18	—	—	—	—	—	—	15	3	18
2018年度	14	5	17	14	4	18	—	—	—	28	9	35

5月1日現員	学部研究生			大学院研究生			大学院特別研究学生		
	私費	国費	計	私費	国費	計	私費	国費	計
2017年度	—	—	—	1	3	4	6	0	6
2018年度	—	—	—	2	3	5	5	0	5

出典：文系教務課記録

資料8 G30国際プログラム学生受入状況 (大学院)

	「アジアの中の日本文化」			言語学・文化研究		
	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数
2017年度	26	2	2	45	6	6
2018年度	36	5	5	32	8	7

出典：文系教務課記録

資料9 G30「アジアの中の日本文化」プログラム学生受入状況 (学部)

	出願者数	合格者数	入学者数	入学定員
2015年度	51	7	4	若干名
2016年度	47	5	4	若干名
2017年度	33	7	5	若干名
2018年度	40	6	3	若干名

出典：文系教務課記録

資料10 3年次編入学生受入状況 (学部)

経歴	入学者数							入学定員
	4年生大学卒業	短期大学卒業	高等専門学校卒業	専修学校卒業	外国大学卒業	大学在学(退学)	計	
2015年度	1	1	0	0	0	6	8	10
2016年度	4	2	0	1	0	4	11	10
2017年度	4	1	0	0	0	5	10	10
2018年度	1	1	0	1	0	7	10	10

出典：文系教務課記録

資料11 科目等履修生、特別研究学生、研究生等受入状況 (大学院)

5月1日現員	科目等履修生	特別研究学生	研究生	特別聴講学生
2017年度	2	—	5 (4)	6 (6)
2018年度	8	5 (5)	6 (5)	5 (5)

11月1日現員	科目等履修生	特別研究学生	研究生	特別聴講学生
2017年度	6	—	9 (8)	11 (11)
2018年度	8	6	7 (7)	10 (10)

注：研究生の括弧内は留学生で内数、特別聴講学生は短期交換留学生。

出典：文系教務課記録

資料12 科目等履修生、聴講生、研究生受入状況 (学部)

5月1日現員	科目等履修生	聴講生	研究生	特別聴講学生
2015年度	8	9	7 (6)	21 (21)
2016年度	7	6	10 (10)	27 (27)
2017年度	9	5	27 (27)	40 (39)
2018年度	7	6	40 (40)	26 (26)

11月1日現員	科目等履修生	聴講生	研究生	特別聴講学生
2015年度	9	9	26 (25)	25 (25)
2016年度	10	6	32 (32)	31 (31)
2017年度	8	5	77 (76)	41 (41)
2018年度	7	9	75 (75)	15 (15)

注：研究生の括弧内は留学生で内数、特別聴講学生は短期交換留学生。

出典：文系教務課記録

1-3 国際化

資料13 文学部・人文学研究科が窓口となる大学間協定 (2018年度末現在)

プネー大学 (1973.5.7-)	スラバヤ国立大学 (2000.8.1-)	梨花女子大学校 (2002.5.24-)
木浦大学校 (1999.5.11-)	オーバーリン大学 (1973.2.26-)	
エクスマルセイユ大学 (2015.7.16-)	吉林大学 (1985.5.23-)	
ハーバード・イェンチン研究所 (1986.3.11-)	ブラジリア連邦大学 (1999.11.11-)	

出典：文系総務課記録

資料14 文学部・人文学研究科 部局間学術交流協定 (2018年度末現在)

東呉大学外国語文学院 (2007.3.1-) 北京第二外国語学院 (2000.2.22-) 韓国外国語大学一般大学院・国際地域大学院 (2009.8.6-) 東華大学外語学院 (2014.11.28-) 上海外国語大学日本文化経済学院及び国際文化交流学院 (2015.7.16-) 西安外国語大学日本文化経済学院 (2016.3.10-) 中国人民大学外国語学院 (2016.11.4-) ※ 更新手続き中 パジャジャラン大学文学部 (2001.1.8-、文学部・人文学研究科) 天主教輔仁大学外語学院 (2018.8.29)

出典：文系総務課記録

1-4 FD

資料15 ファカルティ・ディベロップメント開催実績一覧 (2018年度)

開催日	講演者	題目
2018年12月19日	三輪晃司	人間を対象とした調査・実験の研究倫理—心理言語学の立場から—
2019年1月23日	齋藤文俊	学部専門教育・大学院教育の公正な成績評価に関するアセスメント

出典：人文学研究科教育研究推進室資料

1-5 大学院生・若手研究者等の支援

資料16 大学院生支援事業実施状況 (2018年度)

事業名	前期課程		後期課程		計 (件)	助成額 (千円)
	国内	国外	国内	国外		
研究発表支援事業			0	7	7	434
フィールド調査プロジェクト	1	4	2	2	9	1026
計	1	4	2	4	15	1460

出典：人文学研究科教育研究推進室資料

資料17 TA、RA 採用実績一覧

	TA	全学 TA	RA	PhD 登龍門研究アシスタント	卓越 RA
2017年度	100	52	12	—	—
2018年度	98	49	12	—	—

出典：文系総務課記録

資料18 各種研究員等受入状況 (人)

種別	博士研究員	博士候補 研究員	CHT 共同研究員	JACRC 共同研究員	YLC 助教	客員研究員
2017年度	17	25	5	0	3	9
2018年度	16	20	8	0	5	18

注：CHT=人類文化遺産テキスト学研究センター

JACRC=「アジアの中の日本文化」研究センター

出典：文系総務課記録

資料19 学術振興会特別研究員 (人)

	DC1	DC2	PD	RPD	計
2017年度	8	6	4	0	18
2018年度	5	3	4	0	12

出典：文系総務課記録

1-6 教育の成果

資料20 教育環境の満足度調査 (2018年度)

・教育環境の満足度調査の項目 1. 教室や図書室などの施設設備の満足度を教えてください。 2. シラバスや受講している授業の内容についての満足度を教えてください。 3. 所属する分野・専門の教員からの研究指導などについての満足度を教えてください。 4. 全般的にみた、本学部・研究科の教育および学習環境についての満足度を教えてください。							
・教育環境の満足度調査の結果 (%)							
設問	とても満足	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	とても不満
1.	15.4	34.6	17.3	7.7	0.0	11.5	5.8
2.	30.8	32.7	15.4	11.5	0.0	3.8	0.0
3.	36.5	32.7	5.8	15.4	0.0	1.9	1.9
4.	9.6	26.9	21.2	25.0	0.0	5.8	1.9

出典：文系教務課記録

資料21 大学院生の研究業績件数

	論文発表数	学会発表数	受賞数
2017年度	7	52	0
2018年度	46	144	1

資料22 オープンキャンパスにおけるポスター発表件数

	件数
2017年度	12
2018年度	11

出典：広報体制委員会記録

資料23 『名古屋大学人文学フォーラム』論文数

年 度	論文数
2017年度第1号	20
2018年度第2号	25

出典：『名古屋大学人文学フォーラム』各号

1-7 進路

資料24 就職活動セミナー開催実績一覧 (2018年度)

開催日	名称	講師
2018年5月18日	インターンシップ説明会	井戸智子 (学生相談総合センター就職相談部門)
2018年5月18日	教職セミナー	宇佐見萌衣 (愛知県立時習館高等学校 英語科) 天野義真 (南山高等学校女子部 社会科) 黒野普慈佳 (愛知県立惟信高等学校 国語科)
2018年10月29日	文学部・人文学研究科 就職セミナー 2018	○内定者からのお話 丸山明音 (地理学 公務員) 丹羽 叶 (日本語学 教員) 梁 洵 (東洋史学・大学院 企業) ○面接対策・面接のポイント解説 大上学 (株式会社マイナビ)
2018年10月29日	家庭裁判所調査官業務説明会	名古屋家庭裁判所職員 (名古屋大学卒業生 2名)
2018年12月19日	第2回インターンシップ説明会	船津静代 (名古屋大学キャリアサポート室) 寺田彩子 (住友生命 日本語学2007年度卒) 稲垣覚子 (三井住友海上 言語学2017年度卒)

出典：進路・就職対策委員会資料

資料25 進路状況 (2018年度、学部)

就職	民間企業	建設業	3
		製造業	23
		電気・ガス熱供給・水道業	0
		情報通信業	16
		運輸業	1
		卸売・小売業	7
		金融・保険業	8
		不動産業	3
		学術研究・専門・技術サービス	5
		宿泊業・飲食サービス業	0
		生活関連サービス業・娯楽業	2
		教育・学習支援業	8
		医療・福祉	2
		複合サービス業	1
		サービス業	2
	小計	81	
	官公庁	36	
	教員	8	
	その他	0	
	合計	125	
大学院進学		10	
その他		13	
総計		148	

出典：文系教務課記録

1-8 高大連携

資料26 高校訪問、出張講義等実施実績一覧

教員による高校訪問

2015年度		2016年度		2017年度		2018年度	
7月3日	三重県立 桑名高校	7月1日	私立高田高校	5月25日	岐阜県立 斐太高校	5月24日	岐阜県立 斐太高校
7月13日	名古屋市立 緑高校	7月11日	愛知県立 明和高校	6月15日	私立高田高校	5月30日	私立麗澤瑞浪高校
7月14日	名古屋市立 向陽高校	7月12日	岐阜県立 多治見北高校	6月29日	静岡県立 掛川西高校	6月7日	私立愛知淑徳高校
9月7日	静岡県立 三島北高校	7月13日	静岡県立 掛川西高校	7月10日	愛知県立 横須賀高校	6月27日	愛知県立 常滑高校
9月11日	長野県立 上田高校	10月14日	愛知県立 時習館高校	7月10日	愛知県立 明和高校	6月29日	愛知県立 大府東高校
9月24日	愛知県立 刈谷高校	10月17日	愛知県立 江南高校	7月11日	岐阜県立 多治見北高校	7月9日	愛知県立 明和高校
9月24日	愛知教育大学 附属高校	10月17日	愛知県立 岡崎北高校	9月11日	岐阜県立 岐阜北高校	7月19日	私立名古屋高校
10月19日	愛知県立 岡崎北高校	10月25日	愛知県立 豊橋東高校	9月13日	愛知県立 松蔭高校	9月27日	愛知県立 松蔭高校
10月19日	愛知県立 江南高校	10月26日	愛知県立 豊田北高校	10月3日	私立南山高校・中 学男子部	10月12日	愛知県立 時習館高校
10月21日	愛知県立 豊田北高校	11月2日	愛知県立 豊田西高校	10月5日	名古屋大学 教育学部附属高校	10月15日	愛知県立 江南高校
10月22日	愛知県立 半田高校	12月6日	岐阜県立 多治見北高校	10月16日	愛知県立 江南高校	10月22日	愛知県立 岡崎北高校
11月5日	愛知県立 豊田西高校	12月12日	愛知県立 西尾高校	10月16日	愛知県立 岡崎北高校	10月23日	私立南山高校・中 学男子部
11月18日	三重県立 四日市高校			10月19日	愛知県立 半田高校	10月24日	愛知県立 豊田北高校
				10月23日	愛知県立 大府東高校	11月1日	名古屋市立 菊里高校
				10月25日	愛知県立 豊田北高校	11月8日	愛知県立 豊田西高校
				11月2日	愛知県立 豊田西高校	11月9日	愛知県立 半田高校
				11月9日	名古屋市立 菊里高校	11月13日	岐阜県立 多治見北高校
				11月10日	愛知県立 半田高校	11月15日	愛知県立 西尾高校
				11月15日	愛知県立 西尾高校	12月6日	愛知県立 名古屋西高校
				3月13日	福井県立 藤島高校	1月11日	私立土佐塾中学・ 高校
				6月7日	岐阜県私立高等学 校保護者会※		
				8月11日	愛知県立 明和高校※		
				9月30日	三重県立 四日市高校※		

高校による大学見学・訪問

2015年度		2016年度		2017年度		2018年度	
6月8日	浜松市立 浜松高校	6月6日	浜松市立 浜松高校	5月24日	愛知県立 安城南高校	6月4日	浜松市立 浜松高校
7月2日	岐阜県立 多治見北高校	9月2日	三重県立 津西高校	6月5日	浜松市立 浜松高校	7月6日	私立愛知高校
12月9日	私立愛知高校			6月21日	私立麗澤瑞浪高校	7月10日	愛知県立 知立東高校
				7月12日	愛知県立 知立東高校	7月31日	愛知県立 名古屋西高校
						3月12日	福井県立 藤島高校

注：※印は保護者向け

出典：文系教務課記録・広報体制委員会議事録

2. 研究の現況

2-1 研究の成果

資料27 教員の研究業績

	論文 発表数	著書数	国際学会 招待講演	国内学会 招待講演	国際学会 口頭発表	国内学会 口頭発表	国際学会 ポスター発表	国内学会 ポスター発表	その他
2017年度	111	34	15	25	73	47	1	2	1
2018年度	108	23	24	15	90	73	4	5	4

資料28 国際／国内研究集会開催状況

	国際研究集会件数	国内研究集会件数
2017年度	14	13
2018年度	19	17

資料29 共同研究実施状況

経 費	授業料	科学研究費 補助金	総長裁量経費	文学研究科 プロジェクト経費	その他
2017年度	3	30	0	2	20
2018年度	2	39	0	4	31

資料30 海外における調査・フィールドワーク件数

実施国	2017年度	2018年度	実施国	2017年度	2018年度	実施国	2017年度	2018年度
アメリカ	1	6	ギリシア	2		ニカラグア		1
イギリス	1	1	グアテマラ	1	1	フィリピン	1	1
イタリア	1	1	クロアチア	1		フランス	2	2
インド	1		スイス		1	ホンジュラス		1
インドネシア	1	1	スペイン		1	メキシコ	1	
ウズベキスタン	1		タイ		1	ラオス	1	
エジプト	1	1	台湾	2	5	リトアニア	1	
エルサルバドル	1	2	タジキスタン	1		ロシア連邦	1	1
オーストリア		1	中国	3	7			
韓国		4	ドイツ		2			

出典：人文学研究科教育研究推進室年報

資料31 研究会実施件数

学会・研究会の名称	2017年度	2018年度
奥田靖雄翻訳プロジェクト研究会	10	8
中国ジェンダー研究会	3	
フーコー研究：人文科学の再批判と新展開	5	10
イマージュ論研究会	1	
名古屋大学会話分析データセッション	11	9
日本アメリカ史学会第14回年次大会（実行委員長）	1	
名古屋大学英語学談話会	10	10
「身体と記憶の共鳴」研究会	2	3
The S.E.P.C (The Seminar on English Poetry and Criticism)	1	
名古屋平安文学研究会	2	2
リーディング・語彙研究会	12	12
日本語教育研究集会	1	1
「日本言語文化研究」学術研究会	1	1
上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会	1	1
フローベール研究会	1	
名古屋音声研究会	13	13
ブルースト研究報告会	2	
名古屋・言語研究会	11	11
名古屋大学国語国文学会	2	2
Nagoya Iconicity in Language and Literature Society (NILLS)	10	10
相互行為のポインティング研究会	2	
「地域と宗教」研究会		3
フェミニズム・ジェンダー読書会		6
1930年前後左翼運動の文化実践におけるジェンダーとセクシュアリティ		2
1930年代における東アジア女性雑誌の比較研究		1
古代アメリカ学会西日本部会		2
考古学研究会東海例会		1
ドイツ社会国家研究会		4
テキストの中の文法研究会		2
アコリス考古学プロジェクト2018		1
賢愚経研究会		9
スイス科研研究会		5
先導的人文学研		6
言語の類型的特徴をとらえるための対照研究会		3
歴史教育研究会		1
東海縄文研究会		1
東アジアと同時代日本語文学フォーラム		1

出典：人文学研究科教育研究推進室資料

2-2 研究資金の状況

資料32 科学研究費等受入状況

		新規採択	継続採択	合計	
2017年度	件数	14件 (うち基盤S:0件 基盤A:0件)	70件 (うち基盤S:1件 基盤A:1件)	84件 (うち基盤S:1件 基盤A:1件)	
	受入金額	直接経費	18,500,000円	114,923,156円	133,423,156円
		間接経費	6,060,000円	28,950,000円	35,010,000円
		合計	24,560,000円	143,873,156円	168,433,156円
2018年度	件数	18件 (うち基盤S:0件 基盤A:2件)	55件 (うち基盤S:1件 基盤A:0件)	73件 (うち基盤S:1件 基盤A:2件)	
	受入金額	直接経費	31,300,000円	80,600,000円	111,900,000円
		間接経費	9,390,000円	24,180,000円	33,570,000円
		合計	40,690,000円	104,780,000円	145,470,000円

出典：文系経理課記録

資料33 寄付金等受入状況 (2018年度)

種別	課題名	出所	代表者	受入金額
寄付金		公益財団法人平和中島財団	市川 彰	590,000円
寄付金		公益財団法人市原国際奨学財団	佐野 誠子	498,500円
寄付金		公益財団法人高梨学術奨励基金	市川 彰	840,000円
寄付金		公益財団法人村田学術振興財団	市川 彰	300,000円
寄付金		公益財団法人クリタ水・環境科学振興財団	梶原 義実	700,000円
寄付金		公益財団法人大幸財団	小川 翔太	160,000円
寄付金		公益財団法人大幸財団	藤木 秀朗	120,000円
寄付金		公益財団法人カシオ科学振興財団	玉岡 賀津雄	1,000,000円
寄付金		公益財団法人豊秋奨学会	ホブソン ネイスン	220,820円
受託研究	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 グローバル展開プログラム	独立行政法人日本学術振興会	阿部 泰郎	3,624,000円
受託事業	研究拠点形成事業 A. 先端拠点形成型	独立行政法人日本学術振興会	阿部 泰郎	12,750,000円
補助金	科学技術人材育成費補助金	独立行政法人日本学術振興会	近本 謙介	32,960,000円
補助金	科学技術人材育成費補助金 (科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業)	文部科学省 (学内配分)	松井 裕美	1,000,000円
補助金	科学技術人材育成費補助金 (科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業)	文部科学省 (学内配分)	程 永超	1,000,000円
補助金	科学技術人材育成費補助金 (科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業)	文部科学省 (学内配分)	川本 悠紀子	1,000,000円
補助金	科学技術人材育成費補助金 (若手研究者スタートアップ研究費)	文部科学省 (学内配分)	松井 裕美	5,000,000円
補助金	科学技術人材育成費補助金 (若手研究者スタートアップ研究費)	文部科学省 (学内配分)	程 永超	5,000,000円
補助金	科学技術人材育成費補助金 (若手研究者スタートアップ研究費)	文部科学省 (学内配分)	川本 悠紀子	5,000,000円

出典：文系経理課記録

資料34 名古屋大学教育奨励費採択状況

	プロジェクト名	代表者	配分額
2017年度	文化資源調査研究者養成プロジェクト	古尾谷 知浩	379,000円
2018年度	文化資源調査研究者養成プロジェクト	古尾谷 知浩	287,000円

出典：文系経理課記録

資料35 人文学研究科教育実施経費配分状況 (2018年度)

プロジェクト名	代表者	配分額
日本史博物館実習 I	日本史学	34,000円
文化資源学研究 I	日本史学	20,000円
文化資源学研究 III	日本史学	80,000円
一般博物館実習 (館園実習、実務実習)	博物館学	100,000円
考古学実習 I a、I b (新) 2 A、2 B (旧)	考古学	685,800円
考古博物館実習 I a、I b (新) 2 A、2 B (旧) 文化資源学	考古学	376,000円
英語学演習「現代英語学」	英語学	90,000円
美術史実習 2 A、2 B	美学美術史学	525,375円
フランス文学総合演習 II b (人文学研究科 MC) フランス文学演習 (文学研究科 MC、DC)	フランス語フランス文学第 2	22,500円
フランス語学基礎演習 II a、II b (新) フランス語学講義 (旧)	フランス語フランス文学第 2	15,600円
英語教育実践演習	英語高度専門職業人コース	68,133円
宗教人類学基礎演習 a、b (人文学研究科 MC) 文化人類学「奥三河の民俗芸能調査研究」A、B (旧)	文化人類学	718,911円
文化人類学フィールド入門実習 I	文化人類学	92,180円
西洋古典学の授業全体	西洋古典学	182,250円

出典：文系経理課記録

資料36 人文学研究科プロジェクト経費配分状況 (2018年度)

プロジェクト名	代表者	配分額
研究者・大学院生のための言語テキスト検索およびテキストマイニングのワークショップの開催	玉岡 賀津雄	216,000円
インドネシア共和国 スラバヤ大学との学術交流に関するプロジェクト	梶原 義実	375,000円
上海の大学との学術交流推進プロジェクト	杉村 泰	450,000円
言語学・応用言語学分野の教育・研究促進プロジェクト	堀江 薫	375,000円
移動と共生：旅行・留学・亡命をめぐるグローバルスタディーズ	堀江 未央	375,000円
東アジア関係学を踏まえた19世紀東ユーラシア史構築への試掘的研究	程 永超	250,000円
第6回日韓学術交流会—言語文化を巡って—の企画と実施	渡辺 美樹	375,000円
国際シンポジウム「英語圏文学・文化と「社会変動」IV」	長畑 明利	324,750円

出典：文系経理課記録

2-3 研究成果の社会還元

資料37 社会還元活動実施状況 (件)

種 別	2017年度	2018年度
市民向け講演・公開シンポジウム、カルチャースクール等	78	73
新聞記事の掲載・テレビ出演等	21	41
高等学校への出張授業等	26	24
その他	4	15

資料38 地域連携活動一覧

	種 別	内 容	成果物
2017年度	自治体史等	愛知県史、新修豊田市史、西尾市史、小松市史	『愛知県史』通史編2中世1、『愛知県史』通史編3中世2・織豊
	文化財調査事業等	文化庁、愛知県、名古屋市(2件)、豊田市、一宮市、稲沢市、刈谷市、東栄町	
	博物館美術館等	東京国立博物館、国立歴史民俗博物館、国立西洋美術館、名古屋市博物館、岡崎市美術博物館、稲沢市荻須記念美術館、西尾市岩瀬文庫	展示図録『こんな本があった！—岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告展15—』／西尾市岩瀬文庫
2018年度	自治体史等	愛知県史、鳥取県史、豊田市史、知立市史、西尾市史、小松市史	『愛知県史』通史編5近世1、鳥取県史ブックレット
	文化財調査事業等	奈良文化財研究所、名古屋市、豊田市(2件)、稲沢市、刈谷市	
	博物館美術館等	国立歴史民俗博物館、三重県立美術館、名古屋市博物館、岡崎市、稲沢市美術館	

編集委員

古尾谷 知 浩

星 野 幸 代

池 内 敏
(教育研究推進室室長)

梶 原 義 実

宮 地 朝 子

宇 都 木 昭

(アルファベット順)

年報2018 名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室

2019年7月31日発行

発行 名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL (052) 747-6391

組版 株式会社あるむ

〒460-0012 名古屋市中区千代田3-1-12
TEL (052) 332-0861
